

信念と妄想

宮園健吾 (Kengo Miyazono)

東京大学・日本学術振興会特別研究員 (DC2)

精神医学においては通常、妄想は一種の信念として想定されている。例えば、アメリカ精神医学会発行の「精神疾患の診断と統計の手引き (*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM*)」によれば、妄想とは、

外界についての、誤った推論に基づいた偽なる信念であり、ほとんど誰もが信じていることに反して、また、疑いの余地のないことがら、あからさまな反対の証明や反対の証拠に反して堅固に維持される信念

だとされる。具体的には、例えば、「私の妻は火星人に誘拐されてしまって、今、目の前にいるのはすりかえられたロボットだ」などと患者が主張するカプグラ妄想において、DSM によれば、その患者は「私の妻は火星人に・・・」と信じている、ということになる。

他方で、しかしながら、妄想が持つとされる特徴と通常信念の特徴とはかなり異なっていることが知られている。例えば、妄想は信念が通常そうであるような仕方で、証拠に対して敏感ではない、あるいは、妄想は信念が通常そうであるような仕方で、情動的反応や意図的行為を引き起こさないことがある。そして、このような奇妙な事態が「妄想は本当に一種の信念であるのか?」、「実際には、何か別の種類の命題的態度として理解されるべきなのだろうか?」といった哲学的な問いを生じさせており、英語圏ではここ数年の間にこの論点に関して活発な論争が交わされてきた。本稿の目的は、この問題をめぐるこれまでの先行研究を受けて、(1) どのようにこの問題を解決すべきであるか、問題へのアプローチ方法を提案し、その上で、(2) そのアプローチを用いて問題の解決へ向けての示唆を行う、ことである。

本発表の構成は以下の通り。まず、議論の準備段階として、妄想と信念に関する上述の論争を紹介し、そこでは何がどのような理由で問題となっているのかを解説する。とりわけ、妄想を信念だとする「信念説」と、それを想像だとする「想像説」との対立に焦点を当てる (2 節)。次に、その問題を解決するための一つの方法論として「類似性アプローチ」と名付けたアイディアに焦点を当て、これに密接に関連している A. Egan の議論を批判的な視点から検討する (3 節)。その上で、類似性アプローチとは異なる新たな方法論として「異常性アプローチ」を提案し、このアプローチを用いた議論の一例を紹介する (4 節)。暫定的な結論として、私は、妄想は信念ではなく想像であるという想像説を支持することになるだろう。